

誌上 舞台 能

およそ650年の歴史を持つ音楽・仮面劇。現代まで途絶えることなく上演されており、世界無形文化遺産に指定されている。「シテ方」「ワキ方」「狂言方」による舞と謡、「囃子方」（笛方、小鼓方、大鼓方、太鼓方）による演奏で構成される。

能楽師



山本章弘(やまもとあきひろ)

観世流シテ方。3歳で初舞台。幼少より父の故・山本眞義に師事。昭和58年、故二十五世観世宗家・観世左近に入門し、同63年に独立主宰する山本能楽堂で文楽・落語・講談とのコラボを行うなど、能楽フアンの裾野を広げている。大阪文化祭奨励賞、なにわ大賞大阪21世紀協会賞、バナニック教育財団奨励賞などを受賞。

これは世阿弥が『大和物語』の中の話を改作

した「現在能」で、能には珍しいハッピーエンドです。現在能とは、亡霊や神仙などが主役の「夢幻能」に対して、生きている人間のみで展開する曲のことで、面を被らない「直面」で演じます。

主人公は妻と別れた後、落ちぶれて芦売りをしている日下(草香)の里の左衛門。日下は、東大阪市日下町ではないかと言われています。ここは神武天皇が東征の際に最初に上陸した地とされており、昔は海辺でした。

妻一行が舟で淀川を下る道中で謡われる大江の岸は八軒家浜、夫婦が再会する難波の浦は上町あたりでしょうか。かつての大阪は「八十島」と古称されたほど川や海が入りこんでいた土地で、そこかしこに水辺があつて芦が生い茂っていました。

そんな寂しい水辺で芦を売るのは、生きるために堪え忍んでのことでしょうか。いいえ、割り切つてやっているので。買つてもらうために、面白い口上まで述べて堂々としています。この場面では、見物人に「芦と葦は同じか」と問われて、「ススキと尾花のようなもの」と得意即妙に答えるなど、教養人であることも示唆しています。

こんな達観した男でも、相手の貴婦人が妻だと知った瞬間、羞恥心を感じて逃げ出してしま

零落した夫と栄達した妻の邂逅

芦刈

案内人 山本章弘



う。以前は作り物の小屋に身を隠していたのですが、現在の観世流では橋掛かり(左奥の廊下)へ退く動作でそれを表現しています。

小屋の戸口に立っている妻に対して左衛門は、「芦」と「悪し」を掛けた和歌を詠んで詫言います。「君なくて芦刈りけりと思うにもいとど難波の浦は住み憂き」

妻は恨んではないかと返歌します。「悪しからじ善からんとぞ別れにし なにか難

波の浦は住み憂き」

この場面では、つい芝居がかつて感情の高ぶりが顔に出そうになります。これは能ではNG。自分に陶醉してはだめなんです。カラオケで熱唱しているオヤジを暑苦しく思うのと同じです(笑)。

舞台も演技も、なぜこんなに簡素で抑制的なのかというと、観客に自由に想像してもらうため。見えない世界を見せる究極の仕掛けなんです。難しく考えないで、想像力を遊ばせるつもりで、能楽堂へお越しください。十人十色の心象風景が広がるはずですよ。

物語のあらすじ

能「芦刈」

日下の里の左衛門は貧しさゆえに妻を離縁し、妻は京へ上ります。物語は貴人の乳母となり栄達した妻が、従者を伴って里帰りするところから始まります。しかし妻一行が日下を訪ねると、左衛門は行方知れずになっています。悲嘆に暮れる妻に従者は気晴らしに難波の浦へ行くよう勧めます。浜には面白おかしく芦を売る男がいました。妻は興を感じて芦を所望します。男が手渡そうとした時、顔を見た妻はびっくり。男は左衛門だったのです。とっさに芦小屋に隠れた左衛門は妻への思いを和歌にして詠みます。妻は夫を今も慕っていると返歌します。互いの気持ちを確かめ合った二人は、仲良く京へ上つていくのでした。

●山本能楽堂

「谷町4丁目」下車、徒歩2分。
大阪市中央区徳井町1-3-6
☎06-6943-9454
<http://www.noh-theater.com>
<http://blog.nohperformer.com>

